

氏名	坂本夏子	
学位の種類	博士（美術）	
学位記番号	博美第2号	
学位授与年月日	平成24年3月25日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当	
題目	論文題目	「絵の思考 ～描く行為が思考となる過程～」
	作品題目	1 Octopus Restaurant 2 Queen of White 3 NAGISA
審査委員	主査教授	久保田 裕
	副査教授	山本 富章
	副査教授	小林 英樹

1 学位論文の要旨

絵画制作において、絵画空間のあり方を決定するのは、通常作者の作為である。しかしそれ以上に、作者と空間との接触が即興的に生み出す効果そのものが、絵画空間のあり方にとって決定的な要因となることがしばしばある。後者の場合、作者の意図的な行為を超えてもたらされた空間が、絵画制作のプロセスにとって「効果」となるか、「ミス」となるかは、作者の判断次第である。では、いかなる理由で、作為を超えた空間は、「効果」となるのだろうか？

この問いに答えるために、本論文では、絵画空間の有機的なふるまいを、「絵の思考」という観点から捉える。「絵の思考」とは、描く行為によって絵画空間と作者が一体となることから生まれる思考である。言い換えよう。画家は、まず、絵の構造をつくる。その構造は、あるシステムをそれよりも大きな秩序の中に組み込んだ入れ子構造をしている。そのシステムとは、可変的で絶え間なく更新されるシステムである。この構造のなかで、描く行為が思考として実現されるのである。

論文は以下の手順で進む。第一章では、身体感覚と描画の関係を歴史的・理論的・実験的に考察する。描画が思考となり、有機的な絵画空間を生み出すことについて論じる。その後第二章では、これらの論題を、自作の制作プロセスの記録の分析と、参考となるさまざまな種類の作品の分析に基づいて、具体的に探る。

それぞれの絵は独立した構造を持っており、それらの構造は、制作プロセスに、異なった問題を投げかける。それぞれの問いに対する「絵の思考」からの答えが、結果としてそれぞれの絵画独自の空間になっていることを明らかにしたい。そうした作業を通じて、先行研究では論じられていなかった、常に可変的な絵画空間との対話を概念化し、現代においてもなお絵画が独自の可能性を有することを論証する。

絵画空間は、予定されたイメージや概念のトレースによってつくられるものではない。それは、「絵の思考」の成長とともに、常に変化する可能性を維持している。この絵画空間は、作者の精神の強烈な反映であり、それを独自の表現に導くプロセスになりうる

のである。

2 学位論文審査の要旨

論文：

坂本夏子の絵画制作において、絵画空間を支配するのは作者の行為のみならず、空間との接触が即興的に生み出す効果そのものである。作為の意図を超えた空間を「効果」とするか「ミス」と判断するかは作り手次第である。作為を超えた空間を「効果」にするとはどのようなことだろうか。この問いから始まる。可変的なシステムを大きな秩序の中に組み込んだ絵の構造を作ったうえで描く行為の思考化を行う。描く行為で絵画空間と作者の一体化から生まれた思考を「絵画の思考」と名付けている。

身体感覚と描画の関係を歴史的、実験的に考察し、制作における絵画空間との関わり、その中で絵画の思考について、自作の制作プロセスの記録、参考美術作品などをもとに身体的に探り、総合的な考察を行っている。

自己の制作体験に基づき、芸術論的思索を展開する実技系博士論文として大変優れ、高く評価できるものである。

作品：

《Octopus Restaurant》 2010年、227×181cm、キャンバスに油彩

「夢」が持つ構造を絵画空間に応用することを試みた作品で、夢の断片的なビジョンが非論理的に組み替えられ、現実世界と異なる関係を生み出すことなどを絵画の構造に重ねて構想した作品で、部分としての空間が画面の中で接触し、少しずつズレながら歪みを生じさせる空間は独自の不思議な世界をつくり、見る人を夢の奥へと引き込ませる視覚効果をつくり、夢をテーマとした作品として秀逸な表現となった。

《Queen of White》 2011年、227×181cm、キャンバスに油彩

ルイス・キャロルによる「鏡の国のアリス」という文学作品の一部を引用しながら絵画空間について考察した作品で、我々が感じる時間には現実世界において一方向にはたらく時間と、脳内において記憶を思い出すことや未来を予測することなどにより複雑に交差する時間の方向を「鏡の国のアリス」の物語からイメージし、順列な非論理的物語を並列な場所に再構築することで絵画の謎に触れる考え抜かれた制作である。影の存在が具体的な空間や物語の虚構性を強くし、全体の淡い色調は美しい絵画的空間となった。物語からイメージする世界へと絵画的構築をした作品として大変優れている。

《NAGISA》 2012年、197×291cm、キャンバスに油彩

波打ち際に肩車をして走る少女が並ぶ。空を飛ぶ鳥がそれを阻止するかのよう戯れている。明るい色彩の中、少女たちと鳥は砂浜に影を落とす。背景の波の大きなうねりと走る少女と鳥の形体、それらの落とす影は作品に躍動感を与え、外光の輝きは色彩の光となって表現され、博士後期課程における研究の集大成として大きな成果を生み出している。

* 三点の作品から言えることは、坂本夏子は「絵画は言語表現できないゆえに絵画表現するのである」ととらえながらも、明確に言語化できない非論理的世界を自己のイメージを押し広げ、深めながら独自の表現にした作品は、かなりレベルが高いものと言える。

また、学部、博士前期の時期から行っているメリハリのある個展や、豊田市美、国立国際美術館、上野の森美術館などの企画展などにも招待作家として招聘されるなど、全国的に注目されている作家のひとりであることも、客観的な評価を裏づけるものである。

以上述べてきた通り、坂本夏子の「論文」、「作品」の内容は、いずれも博士の学位を与えるのに十分であると結論した。